

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルは短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのか

ドル/円相場のトレード戦略

注目されることになるでしょうが、1月の米FOMCでは声明文から追加利上げのバイアスが削除されたことにより政策スタンスが大きく変わった可能性が指摘されており、当面の上値は限られたものとなりそうです。

ただし、2月の米雇用統計は好調を維持しており、早期に明確なファンダメンタルズの変化が起きる可能性は低く、また米中通商交渉の前向き妥結の期待感もあり目先ドルは底堅く推移しそうです。当面は、108円から114円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、111円55銭で寄り付き、20日に111円70銭まで上昇する場面もみられたものの、米FOMC（連邦公開市場委員会）を控え、総じて111円台前半での小動きに終始しました。

FOMCでは、市場予想よりもハト派色が強く、ドルは下げに転じ110円を割り込んで週を越える展開となりました。

今週は、ドルの上値が重いものの、下値も109円半ばからは堅くなってくると思われ、株価をにらみながら110円中心の動きが予想されます。

想定レンジは108円50銭から111円を見込みます。